


令和 8 年 度

兵庫県公立高等学校学力検査問題

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1ページから10ページまで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙の右上の欄に受検番号を書きなさい。
- 4 解答用紙の  の得点欄には、何も書いてはいけません。
- 5 答えは、全て解答用紙の指定された解答欄に書きなさい。
- 6 問題は五題で、10ページまであります。
- 7 「終了」の合図で、すぐ鉛筆を置きなさい。
- 8 解答用紙は、机の上に置いて、退室しなさい。

問題は、次のページから始まります。

一次の【会話文】は「詩を紹介しよう」という単元で、Aさん・Bさん・Cさん・Dさんが授業での全体発表に向けて準備をしている場面である。四人は、図書館で見つけた吉野弘の二つの詩について、グループで話し合っている。【詩Ⅰ】・【詩Ⅱ】、【会話文】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【詩Ⅰ】

彩あひだしい数の

夥あひだしい数の柿の実が色づいて
瘦すくせぎすな柿の木の華きは奢おごな枝を深く撓たむませています

千手観音が手の先に千人の赤子を生んだとしたら
こんなふうかもしれないと思われる姿です

枝を撓たむませている柿の実

母親から持ち出せる限りを持ち出そうとしている子供のようです

能あたう限り奪あって自立しようとする柿の実の重さが
限りなく与えようとして瘦すくせた柿の木を撓たむさせています

晩秋の

赤味を帯びた午後の陽差ひざしに染められて

(注) 千手観音——千本の手を持ち、あらゆる生きものを救う
とされたもの。

【会話文】

生徒A 【詩Ⅰ】の「千手観音」が柿の①を、「赤子」が柿の②をそれぞれ表

す比喩が印象的で、木の上に果実が実る様子から「果」の漢字ができたのが分かるね。

生徒B 柿の実が色づき育っていく様子を「自立」と表現しているね。そのことは、「重さ」という語とともに、柿の実の若々しさや生命力を印象付けていると思う。「瘦せぎすな」「華奢な」と表現された柿の幹や枝とは大きな違いだ。

生徒C 【詩Ⅰ】に登場する「持ち出そう」「与えよう」という柿の擬人化を思わせる表現が、【詩Ⅱ】でも使われているよ。「柿の知恵」「味な生き方」という表現だね。

生徒D 「味な生き方」は面白いよね。「味な」という表現に柿の木の「生き方」が象徴されていると思う。具体的には、柿の④「生き方のことだよ」。

生徒B 柿の実という果実は、文字通り木が生きた「成果」「結果」だけれど、種を通じて次の生命という未来にもつながっている。そこに「柿の知恵」が表れているね。

生徒A なるほど。発表でも詩の表現を取り上げながら柿の木の性質を紹介したいね。

生徒C ⑤「単なる柿の木の詩として理解するだけではないのかな。特に【詩Ⅱ】は「柿の木抒情」という題がつけられている。「抒情」は「叙情」と同じで、感情を表現することだから、柿の木を見た作者やその気持ちにも注意を払うべきだよ。

生徒B 賛成。【詩Ⅰ】では⑥「第五連」に注目だね。倒置で作者の見た景色が語られる。

生徒D そうか。思い描いていた風景が変わったよ。色彩にも注目するべき詩なんだね。作者ということなら、【詩Ⅱ】の第四連に「私」とあって、ここで作者の思いが語られている。自分が生きるために自分よりも他者を優先する自己犠牲の心が、地球上

で最も進化を遂げている人類に欠けているのではないかと疑問を投げかけている。

生徒C 改めて二つの詩を見直すと、⑦「二つの自己犠牲が描かれているね。【詩Ⅰ】で「千手観音」という比喩を用いたのにも理由があったんだ。そんな柿の木と人間を対比して考えてみると、作者が柿の木を「眩しい思いで」見上げるのも分かる気がする。

生徒A 二つの詩について、ぜひぶん意見が出たけれど、発表ではどうまとめようか。

生徒D ここまでの話を振り返ると、柿に関する描写を丁寧に解説するか、作者の視点や思いを中心にまとめるかのどちらかで進めていくべきじゃないかな。

生徒C むしろ、どちらの方向も大切にして、⑧「という発表にしたらどうかな。」

生徒A その案なら二つの方向性をつなげられそうだし、話の内容も生かせそうだね。

【詩Ⅱ】

柿の木抒情

たくさんの柿の実が赤く色付き
枝を撓ませています

熟れた実は人や鳥たちに食べられ
固い種は地面に落とされるでしょう
落ちた柿は地中に埋もれ
いつの日か新しい生命を芽吹くでしょう

熟れた実で人や鳥を喜ばせたあと
種を大地に蒔いてもらう、柿の知恵
自分が生きるために

先ず、他の生命を喜ばせる、味な生き方
万物の霊長となった人類には
自分より先に他者を喜ばせる生き方が
もう不要なのかと、私は迷いながら
眩しい思いで柿の木を仰いでいました

(注) 霊長——生物の中で最も進化したもの。

問一 空欄①・②に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを、次のア～カから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア ①実 ②木 イ ①枝 ②木 ウ ①木 ②枝
エ ①実 ②枝 オ ①枝 ②実 カ ①木 ②実

問二 傍線部③の漢字の成り立ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 象形文字 イ 指事文字 ウ 会意文字 エ 形声文字

問三 空欄④に入ることばとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 鮮やかな色調をした果実で見ると魅了し、それを口にしたら者には甘い風味で満足をもたらす心温かな
イ 毎年秋に色鮮やかな果実で見ると感動させ、他の生き物に自らの生命を保護してもらおうとする知的な
ウ 秋に美味しい果実を付けて他の生き物に分け与え、他の生き物が生命をつなぐことを手助けする利他的な
エ 風味豊かな果実で他の生き物を喜ばせ、その際に種を地面に落とさせて次代へ生命をつなぐであろう巧みな

問四 傍線部⑤の発言の意図の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 【詩Ⅰ】にこだわった協議になっているので、二つの詩を比較する方向へ軌道修正を図ろうとしている。
イ 協議の方向性が表現の分析に固定化しているため、別の視点から二つの詩を見つめなおそうとしている。
ウ 二つの詩に用いられた表現に注目するだけでなく、内容の差異に注目するべきだと主張しようとしている。
エ 【詩Ⅰ】・【詩Ⅱ】に関する協議内容をまとめつつ、作者を中心に新しい話題へ展開させようとしている。

問五 傍線部⑥が【詩Ⅰ】において果たす役割の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 作者の視線が柿の木から赤い夕日へと移っていったことを示す。
イ 柿の実よりも大きな秋の夕日を描写して自然の偉大さを伝える。
ウ 色づいた柿の実が秋の陽差しで一層赤く染まっていたことを表す。
エ 詩の中に登場する一本の柿の木が持つ寂しさを陽差しで強調する。

問六 傍線部⑦の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 柿の木が柿の実に「限りなく与えよう」としている点と、「熟れた実」を他の生き物に食べさせている点。
イ 柿の木に「夥しい数の柿の実」が実る点と、地面にまかれた種から地中で「新しい生命」が生まれる点。
ウ 「痩せた柿の木」が柿の実に揺さぶられる点と、木から落ちた柿が「地中に埋もれ」て芽吹こうとする点。
エ 「たくさんの柿の実が赤く色付き」くよう柿の木が支える点と、実が「能う限り奪って自立しようとする」点。

問七 空欄⑧に入ることばとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 柿の木に対する作者の鋭い観察眼を詩に沿って説明し、人間と自然の共生に関する自分たちの考えへと進む
イ 柿の木を中心とする作者が見た晩秋の風景について整理し、柿の木の内部に秘められた自然の知恵を伝える
ウ 二つの詩の柿の木に関する特徴的な描写を説明し、柿の木を仰ぎ見るうちに作者に生じた感情へと展開する
エ 二つの詩に共通する授受の関係を整理し、柿の木から人間と自然の関係へと考えを深めた作者の内面に迫る

二次の書き下し文と漢文を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔書き下し文〕

古の所謂豪傑の士なる者は、必ず人に過ぎたるの節有り。人の情に忍ぶ能はざる所の者有りて、匹夫辱めらるれば、剣を抜きて起ち、身を挺して闘ふ。此れ勇と為すに足らざるなり。

天下に大勇なる者有りて、卒然として之に臨むも驚かず、故無くして之に加ふるも怒らず。此れ其の挟持する所の者甚だ大にして、其の志甚だ遠ければなり。

〔漢文〕

古之所謂豪傑之士者、必有過人之節。人情有所不能忍者、匹夫見辱、拔劍而起、挺身而鬪。此不足為勇也。天下有大勇者、卒然臨之而不驚、無故加之而不怒。此其所挾持者甚大、而其志甚遠也。

(注) 卒然——急に。

挟持——心に秘める。

(蘇軾「留侯論」)

問一 書き下し文の読み方になるように、傍線部①に返り点をつけなさい。
問二 傍線部②の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 憂慮する イ 侵入する ウ 感謝する エ 我慢する
問三 傍線部③に関連した【解説文】を読んで、空欄X～Zに入ることはとして最も適切なものを、あとの【選択肢X～Z】のA～Iからそれぞれ一つ選んで、その符号を書きなさい。

【解説文】

本文では「大勇なる者」は「匹夫」と対比的に説明されている。恥をかかされたときに剣を抜いて戦う「匹夫」を筆者は、**X** という理由で、評価をしていない。一方で同じような状況に置かれたとしても、**Y** 態度であり続けることができる者を「大勇なる者」と呼ぶ。筆者はその者の **Z** という信念を評価しているのである。

【選択肢X】

- ア 一時的な感情にまかせて、暴力的な行動に訴えようとする
- イ 昔の武人たちのように、勇気があることを示そうとする
- ウ 自身の実力をわきまえずに、無鉄砲な戦いを挑もうとする
- エ 己の命を顧みることなく、他人の命を助けようとする

【選択肢Y】

- ア 誠実な イ 無欲な ウ 冷静な エ 尊大な

【選択肢Z】

- ア 不正を正すためにはどんなに小さな問題も見逃さない
- イ 大いなる目標を達成するために細事にはこだわらない
- ウ 自分自身が抱く大望の実現に向けて努力を惜しまない
- エ 優れた才能があっても実力をみだりにひけらかさない

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

徳大寺故大臣殿、檢非違使の別当の時、中門にて、使庁の評定行はれ

ける程に、官人章兼が牛放れて、庁の内へ入りて、大理の座の浜床の上に

(食べたものを再びかみなおして)

登りて、これうちかみて、臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師

の許へ遣すべきよし、各々申しけるを、父の相国聞きたまひて、「牛に

分別なし。足あれば、いづくへか登らざらん。厄弱の官人、たまたま出

仕の微牛を取らるべきやうなし。」とて、牛をば主に返して、臥したりけ

る畳をば換へられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。

「怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る」と言へり。

(兼好法師『徒然草』)

(注) 徳大寺故大臣殿——藤原公孝。

檢非違使の別当——治安維持をする役所の長官。「大理」とも言う。

評定——会議。

浜床——貴人が座る台。この上に畳を置いて使用した。

陰陽師——物事の吉凶等をみる役人。

父の相国——藤原公孝の父である藤原実基。「相国」は太政大臣

のこと。

厄弱の官人——身分の低い役人。ここでは章兼を指す。

問一 二重傍線部を現代仮名遣いに改めて、全て平仮名で書きなさい。

問二 傍線部②の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア お呼びになる イ おやりになる
ウ お許しになる エ おいでになる

問三 傍線部①の表す内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 牛を見た徳大寺故大臣殿が、評定の場から姿を消していたこと。
イ 会議に呼ばれていない章兼が、無断で評定の場に座っていたこと。
ウ 章兼と牛が役所の中に入ると、役人が評定の場で倒れていたこと。
エ 牛が役所の中に入り込んで、評定の場で横たわっていたこと。

問四 傍線部③と相国が結論づけた理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 息子を災いから守るためには人助けが不可欠であるから。
イ 牛には罪がなく役人に罰を与えるだけで十分であるから。
ウ 牛の行動には特に何の意味もなく調べる必要はないから。
エ 人々を巻き込んだ大変な出来事には関わりたくないから。

問五 本文から読み取れる内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

- ア 不思議な出来事があったても、過敏に反応せずに落ち着いて事態の本質を見極めれば、何も心配することはない。
イ 不思議な出来事が災いの前兆であっても、日頃からよい行いをしておけば、自身に不幸が訪れることはない。
ウ 不思議な出来事を目にしても、専門家から早いうちに指示を仰いでおけば、重大な事態を招くことはない。
エ 不思議な出来事が不吉だと判断されても、その後適切に対応すれば、恐ろしいことが起きることはない。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

平成の初期、陶芸家の父と祖父を持つ中学生の深田城は、岡山県備前市で陶芸に親しみながら育ってきた。ある夜、城は人間国宝である祖父のような陶芸家になりたいと訴えるも、父に取り合ってもらえないことに我慢できず、家を飛び出した。探しに来た祖父は城を見つけ、氣遣いながら語りかけた。

「古来、備前焼は共同の大窯で焼かれるものじゃった。はじめて個人の窯が開かれたのは明治時代のことで、それまでは町外れの大きな登り窯を共同で使うとったんじゃ」

「うん。天保窯とか忌部神社の近くの北大窯とかじゃな」

「そうじゃ。そんな共同窯の中でも特に大きかったんが、この『南大窯』じゃ。全部で三基の窯があつて、ここで出た大量の焼き損じを捨てるうちに山になった。室町時代からの陶片やら窯道具、壊れた窯跡なんか七メートルも堆積しとるんじゃ」

「七メートルも？」

「そうじゃ。この一帯は昔から物原と呼ばれとつてな。ここは器の墓場、積もった破片は器の死骸、バラバラになった骨じゃ」

ぞつとして、思わず足許に眼を落とす。ここは中川の家のそばだから何度も来たことがある場所だ。でも、まさか自分の足の下にそれだけの破片が積もっているなんて思いもしなかった。

「おまえは太閤様、豊臣秀吉を知つとるか？」

「うん。大坂城を作つた人」

「そう、よう知つとるな」

お祖父ちゃんが僕の頭を撫でてくれた。

「やめてん」

もう声変わりだつてはじまったのに、まるで子供扱いだ。恥ずかしくなつて思わずお祖父ちゃんの手を払いのけると、お祖父ちゃんが驚いた顔をした。なんだか悪いことをした気分だ。

「太閤様はな、備前焼が大好きでな。備前焼の大きな甕を棺にして葬られとつたそうじゃ。もう四百年以上も昔のことじゃ。備前焼の歴史はすべからう」

「うん」

「わしもな、太閤様にならつて自分の骨壺を焼いたんじゃ。……まあ、太閤様みたいな大窯じゃないがな」

「じゃあ、僕も太閤様とお祖父ちゃんの真似しようかな」

「真似したければすればええ。好きなもんを作ればええんじゃ。じゃがな、自分の作つた物には責任を取れ。それだけじゃ」

お祖父ちゃんは僕の頭を撫でようとして、いかんいかと苦笑した。ほつとしたけれど、それはそれで寂しいような気がした。

「学校の勉強も大事じゃやで。備前焼には歴史がある。茶道にも華道にもじゃ。ありとあらゆる素養が必要になる。それに、窯焚きじゃつて窯変を作るには化学の知識が要るからな」

「……うん」

「好きだけ勉強ができて、好きなもんを焼けるんじゃ。今はええ時代じゃ。わしはな、戦争には行つとらん。その代わり、お国の命令で備前焼の手榴弾を作らされとつた。……酷え話じゃ」

「手榴弾で爆弾じゃあな。備前焼で作つたん？」

お祖母ちゃんは「兵站」という言葉を嫌がった。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんにとつて戦争は、僕なんかには想像できないほど重い意味を持つ言葉なのだ。

「そうじゃ。手榴弾の投げすぎで沢村は肩を壊していけんようになった。

可哀想に」

「沢村？」

「すげえピッチャーじゃった。アメリカ相手に好投したんじゃ。あとになつて沢村賞いうのが作られたんじゃ」

お祖父ちゃんはその口を閉じ、しばらくにも言わなかった。僕は黙って待った。黙って待たなければいけないような気がしたからだ。

「……二十歳の頃、岡山中で空襲に遭つた。焼夷弾で街ん中が焼かれていく。炎の中を逃げ惑いながらわしは決心した。もし、生き残れたら、自分の好きなもんを作る。そのための窯を作る。誰がなにを言おうとかまうもんか、と」

お祖父ちゃんの声は堂々として誇らしげだった。月の光を浴びて立つお祖父ちゃんのシルエツトに思わず見とれた。

「わしはな、誰にも手の届かん、誰にも理解できん、誰にも到達し得んなにかを作ろうと思う。そして、その作品に責任を持ちたいと思うとる」

誰にも到達し得んなにか、とはなんだろう。誰にも理解できないなら、責任を取っても誰にもわからないのではないだろうか。

「おまえは高校を出たら大学へ行つて、自分の学びてえことを学べ。作陶はその後でええ」

「高校出てすぐに修業せんでもええん？」

「おまえは思つたよりもぐにやぐにやじや。でも、そりや悪いことじやねえ。他の人よりすこし時間が掛かるだけじや。そして、おまえがモヤモヤするのはとても大切なことじや」

「モヤモヤって大切なん？」

「大切じや。モヤモヤというのは言葉にできん自分の中の鬼、餓鬼みたいなもんじやとわしは思う」

「がき、つてなに？」

「仏教で言うところのな、餓鬼道に落ちた亡者のことじや。常に飢えと渴きに苦しんどつて、決して満たされることがねえ」

「お祖父ちゃんの中にも餓鬼がおるん？」

「ああ、おるとも。わしの腹の中に食い意地の張つた凶暴なやつがな。もつと好かれてえ、もつと褒められてえ、もつと上手になりてえ、もつともつと、ときりがねえ。そのためには、この物原をわしの器の死骸で埋め尽くしてえ、と思うほどじや」

「そんなやつ、追い出せばええのに」

「どうやつても追い出せん。じゃあから、そいつに首輪を付けて見張りながら飼うとる。あいつらは腹が減つてどうしようものうなると、飼い主を喰いはじめるんじや」

餓鬼なんて大げさだ、非科学的だと思つたけれど、一瞬、鼻の奥に土と黴の臭いを感じて、鳥肌が立った。

「なあ、お祖父ちゃん、その餓鬼は僕の中にもおるん？」

「そうじや。誰の中にもおる」

「いやじやなあ。餓鬼なんて飼いとうねえ」

「餓鬼はな、飼い方を学んだら最高の相棒にじやつてなる。飼いは自分で考えろ。たぶん、おまえはそれを見つけるまでに時間が掛かる。じゃあから、大学でも行つてゆつくり考ええ。焦らんでええ」

お祖父ちゃんの声は踏み固められた土のように厳しかったけど、やつぱり温かみがあった。

(注) 登り窯——陶磁器を焼く窯の一種。

天保窯——かつて使われた備前焼の窯。北大窯、南大窯も同じ。

中川——城の同級生。 甕——底の深い壺型の陶器。

窯焚き——窯の火をたくこと。

窯変——陶磁器の焼成中、火炎の性質等の原因によつて変色したり、形が変わつたりすること。

兵站——兵隊の食料を確保すること。

沢村賞——その年にプロ野球で最も活躍した先発投手に贈られる賞。 焼夷弾——ガソリン等の燃料を詰めた筒を束ねた爆弾。

問一 傍線部①・⑤・⑦の漢字の読み方を平仮名で書きなさい。

問二 二重傍線部AとDについて品詞が違うものを一つ選んで、その符号を書きなさい。

問三 傍線部④・⑧の本文中の意味として最も適切なものを、次の各群のAと工からそれぞれ一つ選んで、その符号を書きなさい。

④ ア 実践に移す時の筋道やしきたり

イ 生まれながらに持つ性質や能力

ウ 表現を行う際の手法やふるまい

エ 学びの結果得られる認識や技術

⑧ ア 区別 イ 限度 ウ 道理 エ 結論

問四 傍線部②の城の状況の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 骨や墓場という祖父のことは聞き、見慣れた場所に捨てられた大量の陶片から陶芸家たちの思いを感じとり、恐れをなしている。

イ 無数の陶器の破片は、陶芸家が試行錯誤を続けた証拠だと知り、今後本当に陶芸の道突き進んでいけるのか迷いが生じている。

ウ よく知っている場所が、陶芸家の生き様を物語る場所だということを知り、敬意を払わずにいたことを申し訳なく思っている。

エ 捨てられた陶器の残骸から、大成しないままなくなった多くの陶芸家がいることを感じとり、自分の行く末に不安を感じている。

問五 傍線部③の城の状況の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 祖父が態度を改めたことで日頃の不満からは解放されたものの、祖父のことばの真意を押し量りかねて、今後ひとりでのどのように未来を切り開いていけばよいか分からず将来を心配している。

イ 言い出せずにいた気持ちが祖父に伝わったことで落ち着きを取り戻しつつも、自分が態度で示すまでは、いつも気にかけてくれる祖父ですら気持ちを理解してくれなかったことを残念に思っている。

ウ とっさに厳しい言葉を発してしまったことがきっかけで、祖父が自分に対してよそよそしい態度をとるようになったことに気づき、自分の軽はずみな行為を反省しつつ罪悪感にさいなまれている。

エ 祖父が自分の気持ちを察してくれた結果として、子供のように扱うことがなくなったことに安心しながらも、自分を思ってくれている祖父と触れ合う機会が減っていくことに切なさを感じている。

問六 傍線部⑥の表現の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 激動の時代の中で変化を続けてきた備前焼の歴史を知り、その先頭に立って長年活躍してきた祖父を、城が仰ぎ見る様子を表す。

イ 戦時中에서도幼い頃から抱いていた夢を見失わず、備前焼の伝統を守り抜いている祖父を、城が称賛を込めて見つめる様子を表す。

ウ かつての悲痛な経験の中で沸き起こった陶芸に対する決意を、胸を張って語る祖父の姿に、城が憧れをもって見入る様子を表す。

エ 戦争という苦難を乗り越えた後で抱いた陶芸への覚悟を、暗れ暗れと話す祖父の姿に、城が尊敬のまなざしを向ける様子を表す。

問七 傍線部⑨を説明した次の文中の空欄 a・b に入ることはとして最も適切なものを、a は本文中から四字で抜き出して書き、b はあとのア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

器の死骸となった自作の器の a 等が物原を一杯にしても、b 精神を持って作品を作り続けたいという祖父の心の内が語られている。

ア 慈愛の イ 孤高の ウ 繊細な エ 健全な

問八 傍線部⑩から読み取れる城が祖父から感じとったことの説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 自分を追い込んで作り上げたものには、必ず責任を取らねばならないという厳しさと、周りの声に惑わされずに城が理想とする焼き物を追求していけばよいという優しさ。

イ 自分の抑えがたい欲求をうまく利用し、納得のいく作品ができるまで諦めてはならないという厳しさと、他者とのつながりを大切にしたい陶芸に取り組めばよいという優しさ。

ウ 自分の心こみ上げる陶芸に対する欲望との向き合い方を、独力で探し続けるように諭す厳しさと、その方法をこの先時間をかけて見いだしていけばよいと応援する優しさ。

エ 自分が持つ弱さを受け入れて、それを乗り越えることをめざして勉強を続けるように促す厳しさと、弱さは誰もが抱えているものだと城の不安定な現状を許容する優しさ。

五 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大人は培^{つちか}ってきたリズムを身体のかなかに、すでに確立してもっている。習慣は行動を意識的に反復することで、意志的な行為を無意識化してできてゆくものであるが、大人のレイトスター^⑤たちは習慣がつくられてゆく行程を、楽器のレッスンを通してもう一度反芻^{はんそう}する。実際にはこれは相当大変なことである。せつかく無意識のなかに沈んでいた既得のリズム感覚を呼び起こして、^①いったんそれを意識化し、その上で、そこにあらたに別のリズム体系をつくり上げ、さらにそれをもう一度無意識化してゆく行為は、相当の困難を伴う。大人のレイトスターたちは、意識化と無意識化の間を往きつ戻りつしながら、最終的にもう一度無意識化するという、矛盾だらけの行為に立ち向かおうとするわけである。もともとそれは新しいものを覚えてゆく子供も同じことである。たとえば彼らが最初に文字の読み方を覚えてゆく動作はたどたどしい。しかしターブラ・ラーサ^⑥の子供たちは、習慣化に向かつて着実に歩いてゆく。

楽器のレッスンを受ける大人たちも子供と同じことをしている。ところが大人たちはそうしている「つもり」になっても、実際にはなかなかできない。それは、往々にして大人たちは、譜面の音符に気取られるからである。音符に気を取られてしまうと、音は出ても、音楽にはなってくれない。それは、文章を読むとき、語声は出ても言葉になってくれないのと同じである。「おはようございます」という日本語を読むとき、私たちは「お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す」と切っては読まない。つまり「お」と「は」と「よ」と「う」の間に満ちた音を感じて、この間を一続きにしてリズムと抑揚^②をつけてゆく。この意識が足りない、出した音は言葉にはならないで、ひと昔前のロボットのような音声になってしまふ。これと同じことが大人の生徒の読譜と音楽づくりに言える。大人の生徒が口にする「そうしているつもりですけど」は、音のあるところのみ気を取られてリズムを感じ取っていないことのサインであるとも言える。

大人たちが「つもり」と言うのは、彼らが音楽とは音符と音符の間をまたぐところにある、あるいは、音楽は小節と小節の間にある、ということを十分に想像できないでいることのゴク白^Aである。

音はリズム感のなかで生きている。リズム感^Aは言語文化のなかから生まれてくる。西欧音楽のリズムは音を分断せず、丸く粘って切れ目なく次へ次へと、先へ先へと続いてゆく。音符にないところに潜む音もまた、このリズム感のなかにいる。もし音と音の間にこのリズムがあることを十分に意識し、音を出している間に次の音の準備を意志的に行うのなら、身体はなめらかに動いてくれるだろう。

しかしこれこそが、習慣化しているリズム体系をもつ大人にとって難しい。日本の子供たちも、西欧音楽の楽器を学ぶときの条^Bケン^④は、大人と同じであるが、子供にとって異質のリズム感を学ぶことは、成長のための適度な刺激となり、それが血となり肉となり、身になつてゆく。ところが大人は、新しいものを身体に付け加える^cという、付加の、つまり加サンの行為^cをしているからである。

ところが、別のリズム体系をもうひとつつくりだすことは、リズムの型を確実に持っている大人にとって、別の快^⑤をもたらしものともなる。つまり大人は新しい身体知とリズム感を意識的に自分にくつつけてゆくときに、先にあつたリズム感を意識化して、ふたつのリズムの型を対比する。無意識化されてしまっている所作を、もう一度新たな「型」として取り出してくる。

「型」を意識し、それを別の新しい型と対比することは、大人に別の喜びを教えることになる。つまりこれが「型やぶり／型破り」の美と快を生み出していったものなのである。稽古好きの日本の大人たちは昔から「型」あるいは「かたち」を知ること^Aに重きを置いてきた。習い事とは、意識的に芸をへかたちとして覚えるもので、芸とはへかたちを習うことで始まるものと考えられてきた。ここから日本人は、別の楽しみ方を編み出していった。つまり、「型」を確認して学んで「型」を把握できるよ

うになった大人たちは、今度はその「型」から逸れる面白さを学んで、そこからものの逸れが生む快を、すなわち、「型破り」という快をつくり出すことになった。

芸を身につけて、こうあるべきだという型が明確に見える人のことを私たちは、型を知り、そこからのズレもよく見える人、つまり型に通じた人という意味で、^⑥通人と呼ぶ。彼らは何があるべき原型であるのか、あるいはどこが本来の姿から逸れているのかが分かる。しっかりと身につけた型は、ズレた型を見抜く。そして上手く逸れたものに対して、絶妙の対比感を見出す。型どおりのものと少しだけズレたふたつが出すコントラストが、大きな快を生む。そもそもおかしきとは、あるべきかたちから少しだけ逸れたものが明確に見えたときに生まれ出てくるものだからである。

日本人は子供だけでなく大人も稽古をすることを好んだ。日本人の稽古は究極的に「かたち」とか「型」を学ぼうとする。本来あるべき「型」を学ぼうとする熱心な稽古は、型を重んじるとともに、そこから少しだけ逸れたときに快が生まれることを見出した。絶妙なズレは、「型」を知っていればいるほどよく見えてくる。日本人は微妙な違いを見分けるほど型を知っていることを通とした。日本人の「型」を重んじる感性は、「習慣」の無意識な部分を意識化して、「型」から逸れることを喜ぶ「型破り」を美の様式としていったのである。

(樋口桂子『西洋のレッスン、日本の手習い』)

(注) レイトスターター——ここでは、「大人になって楽器を習い始めた人」を指す。

反芻する——繰り返す。

ターブラ・ラーサ——「何も書いていない白い紙」のことで、外界からの影響を何も受けていない心の初期状態を表す。

問一 二重傍線部A、Cの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のA、

工からそれぞれ一つ選んで、その符号を書きなさい。

A ア 警コクする。 イ 脱コク作業をする。

ウ 時コクを確認する。 工 漆コクの闇を抜ける。

B ア ケン売機。 イ 知るケン利。

ウ ケン築家。 工 申し込みケン数。

C ア 養サン業が発展する。 イ 目サンが外れる。

ウ サン性の薬品。 工 自由サン策。

問二 傍線部①はどの文節に係るか。一文節で抜き出して書きなさい。

問三 傍線部③の熟語と同じ成り立ちの熟語を、次のA、工から一つ選んで、その符号を書きなさい。

A 営業 イ 願望 ウ 前進 工 貸借

問四 傍線部②の理由として最も適切なものを、次のA、工から一つ選んで、その符号を書きなさい。

A 楽器の演奏を習い始めたばかりで、自分がすでに持っているリズム

ム感とは別の感覚を身に付けられるほどの経験を積んでいないから。

イ 楽器を習い始めたばかりで読譜がままならず、自分が生来持っているリズム感を呼び起こせずに、途切れ途切れの音しか出ないから。

ウ 楽譜を正確に読み、その通りに楽器を演奏しようとするあまり、音と音との間がうまくつながらず、不自然な演奏になるから。

工 美しい演奏を行うために楽譜どおりに演奏はできても、独自のアレンジを加えた個性的な演奏をする域には達していないから。

問五 傍線部④の理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 様々な音楽や楽器から新しいリズム感を学ぶと、それを自分のなかに取り入れ、その習慣化に向けて着実に成長を続けていく子供と違って、大人には新たなリズム感を身に付ける際、自分のリズム感の意識化・無意識化を繰り返すという行為に大変な苦勞があるから。

イ 新たな音楽や楽器と繰り返し接する機会を持つことで、次第にリズム感を成熟させ、生まれながらの音楽的才能を開花させていく子供と違って、大人は楽器を習い始めても、すでに自分なりのリズム感が形成されており、新しい感覚を取り入れることができないから。

ウ 新しい音楽や楽器に接することで、自分の持つリズム感に加えて異質なリズム感を新たに身に付け、音楽的な表現力を徐々に高めていく子供と違って、大人は新しいリズム感を身に付けた後でも、無意識のうちに既得のリズム感に立ち返り、進歩が遅れていくから。

エ 多様な音楽や楽器に幼い頃から親しみ、自分の持つリズム感を新しいものへと発展させるたびに、演奏技術を高めていく子供と違って、大人には積み重ねてきた音楽経験に違いがあり、音楽を学び始める段階でリズム感の成熟度に大きな差が生まれているから。

問六 傍線部⑤の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 芸を学ぶ過程で身に付けた〈かたち〉に独自の解釈を加え、他者に伝える時の喜び。

イ 芸を学ぶ段階で身に付けた〈かたち〉に、あえて変化を加えることで生まれる喜び。

ウ 芸の道で古くから受け継がれてきた〈かたち〉を現代的な感性によって改める際の喜び。

エ 芸の道を究めていくにつれて〈かたち〉に対する再現性が高まることで現れる喜び。

問七 傍線部⑥の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 芸の道を学び終え、「型」に精通した者の責任を果たすため、受け継がれてきた伝統を未来へと引き継いでいこうとする人物。

イ 芸に熟達し、「型破り」の芸が本来の「型」とわずかな違いしかなくても、目ざとくそれを見つけ出して楽しむことができる人物。

ウ 既存の「型」から「型破り」を通して新しい「型」を作り、それを独自に発達させて、芸術的な表現力を高めていこうとする人物。

エ 「型」についてよく知り、その「型」を他者と共有することによって、芸の道において独自の楽しみ方を見いだすことができる人物。

問八 中学生のFさんは、本文が収められた本に、壮年期にチェロを習った筆者の【体験談】を見つけ、それと本文を関連付けて考えたことを【ノート】にまとめた。【ノート】の空欄a・bに入ることを最も適切なものを、aは【体験談】から漢字二字で抜き出して書き、bはあとのア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

【体験談】

「腕を動かさない」、「腕ではなく、おなかで弾く」を実践するのは、初心者にはかなり難しい。腕を使わないと弓は持てないし、手は動かせない。もちろん先生の「おなかで弾け」は、ひとつのたとえであり比喩である。おなかで弓は持てない。おなかから腕が出ているような気持ちで、弓を持つわけである。しかし私の身体は、このたとえがいまひとつ分らないでいる。

【ノート】

弓を使ってチェロを「おなかで弾く」時に a に生じる感覚を筆者は述べています。本文の大人たちと同じく【体験談】中の筆者が先生の教えを体現するには時間が必要で、まだ b 段階にあると考えられます。

ア 既存の感覚を自分の中に呼び覚ます

イ 既存の感覚によって教えを反復する

ウ 新しい感覚を既存の感覚に付加する

エ 新しい感覚から既存の感覚へと返る